Newsletter of the Tottori Prefectural Museum

鳥取県立博物館ニュース

No. 32
SEPTEMBER 2021
令和3年9月発行

イラスト　獅子猿《企画展「とっとりの乱世」のメインビジュアル　山中幸盛（鹿介）》

企画展　令和3年10月9日（土）～11月7日（日）
2 とっとりの乱世 ―因幡・伯耆からみた戦国時代―

企画展　令和3年11月20日（土）～12月26日（日）
コレクション・マリアージュ：SOMPO美術館×鳥取県立博物館
3 東郷青児と前田寛治、ふたつの道

企画展　令和4年2月11日（金・祝）～3月21日（月・祝）
4 小早川秋聲 ―旅する画家の鎮魂歌―

5 ［美 術］新収蔵品紹介　竹川宣彰《群落》
6 ［人 文］コ ラ ム　いぎすのこと
7 鳥取県立博物館は50周年を迎えます！
8 「私たちの県民立美術館」の動き
共同企画展「不滅の刀～よみがえる伯耆国の赤羽刀～」

鳥取県立博物館
TOTTORI PREFECTURAL MUSEUM

※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、展覧会等の会期や内容に変更が生じる場合があります。最新情報は鳥取県立博物館ホームページにてご確認ください。

展覧会情報

企画展

とっとりの乱世
―因幡・伯耆からみた戦国時代―

令和3年10月9日(土)～11月7日(日)

(主催) とっとりの乱世展実行委員会

表紙 山中幸盛(鹿介)イラスト 部分

山中幸盛(鹿介)所用の 鉄錆十二間筋兜
(吉川史料館所蔵)

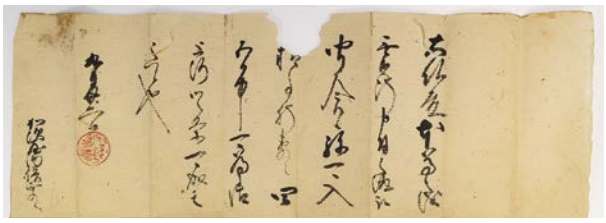
明らかになる乱世の因幡・伯耆国の軌跡

令和３年度企画展「とっとりの乱世―因幡・伯耆からみた戦国時代―」は鳥取県域を構成した因幡・伯耆国(因伯)の戦国時代史を総合的に扱った初めての企画展です。この企画展では鳥取県の戦国時代を約100年間、応仁・文明の乱(1467)から豊臣秀吉と毛利氏の講和が成る天正12年(1584)頃としています。この100年間の歴史の展示は、因伯が「乱世」に翻弄されながらもそれを克服し平和な世の中を目指していく過程を射程にとらえます。

一般的に、因幡・伯耆国は戦国時代において「境目」という、山名氏・尼子氏・毛利氏・織田氏などの大名たちの勢力の錯綜する地域であったと言われています。境目地域は戦争に翻弄され続けた被害者の様に思われがちですが、それは一面的な理解です。因幡・伯耆国の情勢が大大名たちを揺るがし、時には戦国時代史を動かすようなダイナミズムを持っていました。

鳥取藩主・池田家とその家臣の戦国時代

江戸時代の鳥取藩主・池田家も戦国時代を生き延びた家です。また、広域を治めた池田家には名のある武士たちが仕官しており、彼らもかつては地域に君臨した有力武士たちでした。これらの家に残された歴史資料から、鳥取藩主池田家とその家臣たちの「履歴書」を紐解きます。思いもよらない有名な人物や、初公開の新出資料(例えば写真、豊臣秀吉朱印状)も多数登場します。



豊臣秀吉朱印状(部分.鳥取加須屋家文書／個人蔵)

蘇る、戦国の合戦のすがた

当企画展は、歴史資料からのアプローチ以外でも、展示を行います。一つは展示内容に関連の深い５人の武将を題材としたイラストを、『三国志大戦』などの作品で知られる気鋭のイラストレーター・獅子猿氏が描き展示会場を彩ります。例えば、表紙に掲載されている山中幸盛(鹿介)のイラストには、彼が最期に着用していたという兜が描きこまれています。イラストを足掛かりに戦国時代に想いを馳せるのもよいでしょう。他にも合戦図の武士たちの躍動を、具足を着用したマネキンで再現する「甲冑ディスプレイ」展示や(写真)、近年ブームとなっている山城についての最新の研究成果の展示やドローン空撮映像など、胸躍る展示も多数行います。会場に足を運んでいただき、知られざる因幡・伯耆の乱世の目撃者となっていただければと思います。

(学芸課　山本 隆一朗)

甲冑ディスプレイイメージ

■休館日：10月25日(月)
■観覧料：一般/700円(前売・20名様以上の団体・大学生・70歳以上/500円)

関連イベント

■10月17日(日)午後2時～3時30分
シンポジウム「因幡・伯耆国の戦国時代史の今」

■10月24日(日)午前10時～正午　〈要申込〉10月7日(木)～
歴史講座「二つの展覧会で見るとっとりの戦国時代」

■10月31日(日)午後2時～3時30分　《対象：幼児・小学生》
歴史講座「はじめてのお抹茶体験」〈要申込〉10月14日(木)～

■11月3日(水・祝)午後1時30分～3時30分
講演会「中国地域の戦国争乱と「境目」地域の民衆」〈要申込〉
講師：山本浩樹(龍谷大学)

■11月7日(日)午後2時～3時30分
歴史講座「花押のデザイン」〈要申込〉10月21日(木)～

展覧会情報

企画展

コレクション・マリアージュ：SOMPO美術館×鳥取県立博物館

東郷青児と前田寛治、ふたつの道

令和3年11月20日(土)～12月26日(日)

(主催) 東郷・前田展実行委員会

ポール・ゴーギャン《アリスカンの並木路、アルル》1888年、油彩・キャンヴァス、SOMPO美術館収蔵

モダンボーイと哲学者

東郷青児《黒い手袋》1933年　油彩・キャンヴァス　損保ジャパン所蔵　©Sompo Museum of Art, 20023

日本を代表する洋画家である東郷青児(とうごう・せいじ 1897年～1978年)と前田寛治(まえた・かんじ1896年～1930年)。二人はほぼ同時期に日本の地方都市、東郷は鹿児島市に、前田は鳥取県中北条村(現・北栄町)に生まれ、同じように西洋美術に惹かれて画家の道へと進みました。これまでのところ二人のあいだに親交があったことは確認されていませんが、画業の初期には二人とも同時期にパリに留学し、彼の地の様々な美術や文化を吸収します。日本に戻って以降、東郷は二科会で、前田は1930年協会と帝展で自らの絵画を世に問うていきました。同時代のパリの空気を吸った二人ですが、彼らの作風は大きく異なり、モダンボーイと呼ばれた東郷のそれは、装飾的かつ洗練されたモダンな女性像により異国的情趣を伝えようとするもの、一方、学者肌の絵画探究者であった前田のそれは、自身の中にある詩的感性と西洋絵画の伝統を踏まえた写実性とを作品の上で融合させようとするものでした。時代を共有しながらも、二人が西洋から受け取ったもの、そしてそれによって培われた絵画論は異なり、画家それぞれの個性に応じて、彼らの芸術は実に多様に花開いたのです。

前田寛治《仰臥裸婦》1925年　油彩・キャンヴァス　鳥取県立博物館所蔵

2館のコレクションで、日本とフランスの画家たちの作品を

本展は、東京のSOMPO美術館の協力により、約240点の東郷青児作品および東郷に関係する日本・フランスの画家の作品を収蔵する同館のコレクションと、約390点の前田寛治作品と前田の周辺画家の作品を収集してきた鳥取県立博物館のコレクションから90点ほどの作品を選び、織物のように有機的に組み合わせて構成するものです。パリを経由しつつ、大きく異なる作風を築いた東郷と前田。二人の仕事を際立たせながら、彼らが出会った日本とフランスの画家たちの作品にも焦点を当て、近代日本の洋画家たちが追い求め、築こうとしたものとは何だったのかを、あらためて見つめ直したいと思います。

(美術振興課　三浦(みうら) 努(つとむ))

ギュスターヴ・クールベ《まどろむ女(習作)》1852年頃、油彩・キャンヴァス　鳥取県立博物館所蔵

■休館日：12月6日(月)
■観覧料：一般/800円(前売・20名様以上の団体・大学生・70歳以上/600円)

関連イベント

■担当学芸員によるギャラリートーク
11月20日(土)、12月4日(土)、12月18日(土)
各日とも午後2時～3時

■アートシアター
「世界のグレートアーティスト／パリの特別美術展」(DVD)より
11月27日(土)「モネ／クールベ」
12月11日(土)「ピカソ」
12月25日(土)「象徴主義／シャガール」
各日とも午後2時～3時、視聴無料、〈申込不要〉当日先着70名

展覧会情報

企画展

小早川秋聲（こばやかわしゅうせい）　―旅する画家の鎮魂歌（レクイエム）―

令和4年2月11日（金・祝）～3月21日（月・祝）

（主催）小早川秋聲展実行委員会

再び光が当たる日本画家・小早川秋聲の画業

《國之楯（くにのたて）》という作品をご存じでしょうか。長らくその存在を知る人も少なかったこの作品は、『芸術新潮』1995年8月号の特集「戦後50周年カンヴァスが証す画家たちの『戦争』」にて、「忘れられていた日本画家、小早川秋聲（こばやかわしゅうせい）による衝撃の一作」という見出しで紹介されました。戦死した陸軍将校の遺体を正面から描いた作品であり、軍の依頼で描かれたにもかかわらず受け取りを拒否され、後に画家自身の手によって改作されたというドラマチックなエピソードは、人々に衝撃と驚きを与えました。同時に、日本画家 小早川秋聲（1885-1973）の画業に再び光が当たる契機ともなったのです。

《國之楯》1944年　京都霊山護国神社蔵（日南町美術館寄託）

旅、従軍、そして鎮魂

小早川秋聲は神戸で生まれますが、実家は黒坂（日野郡日野町）にある光徳寺というお寺でした。日本画家を志し、歴史画で名高い谷口香嶠（たにぐちこうきょう）、風景画の巨匠 山元春挙（やまもとしゅんきょ）という京都画壇の二人の大家に師事し、文展・帝展を中心に入選を重ねます。青年期に東洋美術を研究するため中国を旅して以来、台湾、満州、朝鮮半島などアジア各地や、インド、ヨーロッパ各国、北米大陸を巡歴し、出会った風景や人々の営みを主題とする詩的で情感豊かな作品を数多く生み出しました。1931年の満州事変の勃発直後から、戦中期を通じては、従軍画家としても活動し、兵士や残された家族の心に寄り添うような独特の哀愁漂う作品の数々は、当時の戦争画において「異色」とも評されます。そして大戦末期の1944年、《國之楯》が描かれます。

終戦後、秋聲は従軍中に患った病が元で展覧会への出品を控えるようになり、1973年に88歳でこの世を去ります。彼は何を思い、何を作品に込めたのか。秋聲の死から四半世紀を経た2000年、日南町美術館で彼の没後初となる回顧展が開催されて以来、徐々に彼の画業の検証が進み、その全貌が明らかとなりつつあります。展覧会「小早川秋聲 旅する画家の鎮魂歌（レクイエム）」は、画業初期から晩年に至るまでの代表作・初公開の作品を含め、100点以上の作品が一堂に会する初の大規模回顧展となります。彼が「郷土」と愛したここ山陰で、秋聲の内に秘められていた豊かで、静かで、哀しく、そしてどこまでも抒情的な世界の広がりをご堪能ください。

《長崎へ航く》1931年　個人蔵

《天下和順》1956年　鳥取県立博物館蔵

（美術振興課　山田 修平（やまだ しゅうへい））

※掲載作品は全て小早川秋聲作品

■休館日：会期中の毎週月曜日（3月21日（月・祝）を除く）
■観覧料：一般/800円（前売・20名様以上の団体・大学生・70歳以上/600円）

関連イベント
会期中の土曜日には、講演会、展示解説などのイベントを予定しています。

topic

新収蔵品紹介　竹川宣彰（たけかわのぶあき）《群落》

鳥取県立博物館の美術部門は、昭和47年の開館以来、鳥取県にゆかりのある作家や作品を収集してきましたが、令和7年春の県立美術館の開館を見据え、国内外の優れた美術や、同時代の美術の動向を示す作品を収集方針に加えることで、より充実したコレクション形成を図ることとなりました。

令和2年度の新収蔵作品《群落》は、上記の新しい収集方針により収集した作品で、1977年東京都生まれの竹川宣彰が2011年に手がけた、のちに作品集の中で「夢の終わり」としてまとめられたシリーズの一作です。

竹川宣彰 《群落》2011 水彩／紙

夜空に奇妙な形をした星が広がり、赤色の地面か沼のような土地に暮らす牛たちの群れ、謎めいた塔と壊れた建造物。SF小説の一場面を思わせる本作は、2011年3月に発生した東日本大震災とその後の福島第一原子力発電所の事故を受け、わずか3ヶ月間で制作されたものです。避難指定区域に残された乳牛のニュースから、普段何気なく飲んでいた牛乳が牛から分け与えられた命であったことに思い至った作者は、牛や牛乳をモチーフとしたこのシリーズを通じて、自然と人間・文明の関係性の再考を促しました。

竹川の作品には、その初期より猫、猿、カニ、セミ、アサリなど、馴染みのある生き物たちが登場します。古来より昆虫や動物は、人間社会の戯画的な表現に用いられて来ましたが、本作では人間以外の視点を作品に組み込むことで、普段とは異なる方法で世界を捉え、新しい理解を得ることを提案しています。この作品に登場する牛は、事故の犠牲者として描かれているのか、あるいは人の管理から解放された自由な者として描かれているのか。またこの景色が10年前のドキュメントなのか、100年後の想像上の風景なのかははっきりしません。この絵の物語は、見る人に委ねられているのです。

事故から10年が経ち当時の記憶が薄れつつある一方で、汚染水の海洋放出や帰宅困難区域の問題など、その影響は今なお続いています。これまでもこれからも世界は複雑で、物事は単線的に進むことはありませんが、この作品は世界を測り、自らの立ち位置を知る21世紀の基準点―立ち戻る場所としてますます重要となるのではないでしょうか。

（美術振興課　赤井（あかい） あずみ）

（参考作品）竹川宣彰《遊牧》2011 牛乳パック、木、接着剤 個人蔵 当館企画展「Our Collections!」での展示風景

（参考作品）竹川宣彰《酪農の未来》2011 水彩／紙 個人蔵

コラム

いぎすのこと

いぎす料理と乾燥させた原料(レプリカ)

郷土食「いぎす」

鳥取県の東伯耆を中心とした地域で夏の食卓に上がる食べものに「いぎす」があります。名前と見た目がユニークで、私もはじめて見たときは驚きました。当地域ではお盆によく食べられるので、淡白な精進料理の印象が強く、若年層は少し苦手かもしれません。また、飢饉の年によく採れる、あるいは飢饉に備えて保存できるから「がしん草」という異名を持ちます(その他「じょう」とも呼ばれるが、その由来は不明)。

全国的には北部九州、信越地方でも食べられ、それぞれ博多の屋台ではお品書きに載る「おきゅうと」、佐渡島周辺で採れる「いご草」(人気コミック『ゴールデンカムイ』の登場人物・月島軍曹の逸話で全国区の名称となった!?)として知られています。これらの原料となるアミクサ・エゴノリ・オゴノリといった紅藻類は、カラーギナンと呼ばれる粘性の糖分を持ち、煮るとゼリー状となる特性を生かして食べられています。※

調理と採取

その調理方法は、予め乾燥させていたものを水に戻し、加水して煮た後、冷えて固まったものを切り、醤油を主に酢、胡麻・生姜・辛子などの薬味を添えていただきます。見た目の形状は蒟蒻や羊羹に似ていますが、食感は海藻そのものです。モサモサした繊維質の歯ごたえに、ほんのり潮の香りがします。

いぎすの採取方法は、沿岸で「さで」という道具に引っ掛けて採ります。同資料は自然の竹の枝分かれした部分を上手く利用して製作されています。長さ約15～20センチメートルの枝を2本、2カ所残した約38センチメートルの割竹を12, 3本束ねて中に重りとなる石を積めたものです。同じく夏季に食べられる心太の原料となるてんぐさを採取する「てんぐさ突き」が金属製であるのに比べて何とも、野趣に富んだ民俗資料です。

「いぎす」の原料のひとつであるオゴノリ
(樹脂封入標本) 当館資料
(海と大地の自然館 で展示中)

名脇役「いぎす」の保存と伝承

今回紹介したアミクサなどの海藻・郷土食「いぎす」は、「松葉がに」や「岩がき」などの魚貝類に比べると決して主役(菜) とはなりそうにありませんが、立派な「つま」、名脇役となる鳥取県の食文化です。博物館では、いぎす料理のレプリカ、オゴノリの樹脂封入標本、いぎす取りを収蔵資料として保存していますが、住民の皆さんも実際の漁法や調理を実践して伝えていっていただきたいものだと思います。

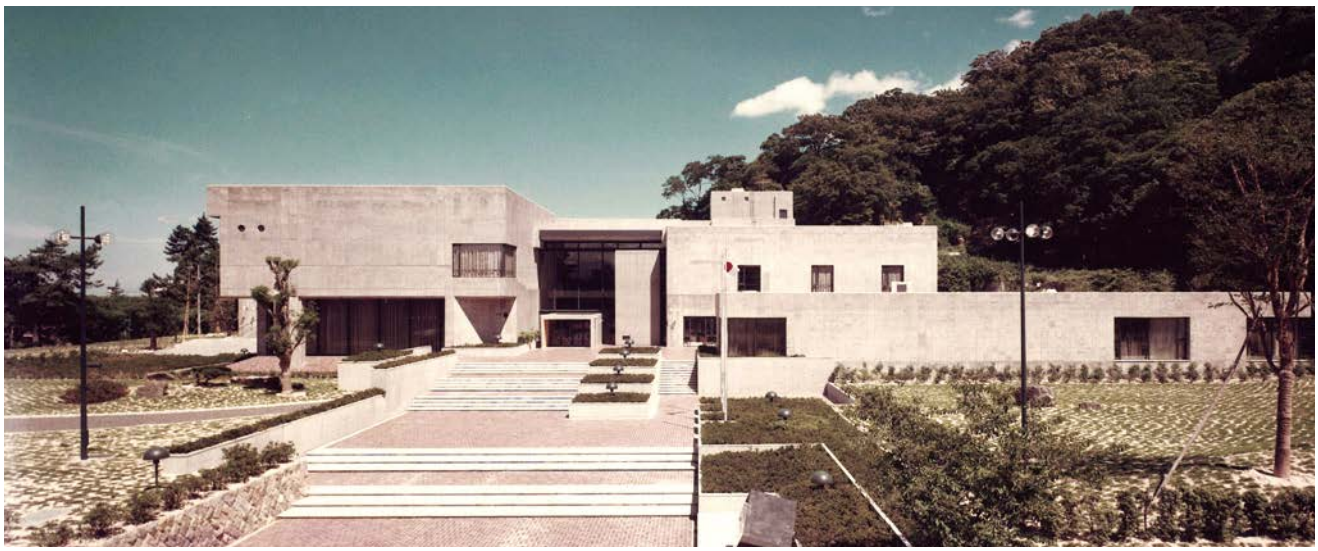
(学芸課　福代 宏)

さで(いぎす採取具)

(参考) てんぐさ突き

※イギスという名の海藻もありますが、当地方の「いぎす」の原料はアミクサが主であると考えられています(今田節子「山陰沿岸地帯にみられる海藻の食習慣とその背景」など)。

鳥取県立博物館は開館50周年を迎えます！



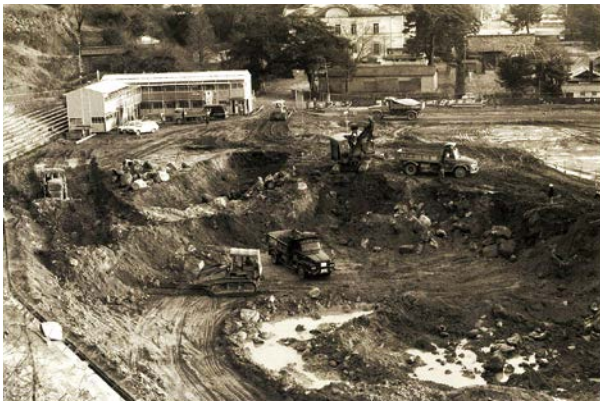
新築された鳥取県立博物館全景（昭和47年）

鳥取県立博物館は、昭和47（1972）年10月に県内唯一の自然・人文・美術の総合博物館として開館しました。来年度の令和4（2022）年に50周年を迎えます。

当館の前身は昭和24（1949）年に鳥取城跡内の「仁風閣」を建物に発足した鳥取県立科学館であり、昭和29（1954）年には生物・地学・考古・民俗を扱う鳥取県立科学博物館となりました。そして昭和47（1972）年に、鳥取県立図書館が保管していた鳥取藩池田家資料を移管し、新たに美術部門を加えて、現在の場所に総合博物館として新設されたのです。

開館当初ですでに約5万点の資料を収蔵していましたが、50年間の活動により、現在その数は約18万点になっています。来年の令和4年度には、50周年を記念した様々な企画を計画しています。皆さんと一緒に、鳥取県立博物館の50年を振り返り、今後の博物館の姿を考えていけたらと思います。

（学芸課　川上（かわかみ） 靖（やすし））



工事開始（昭和45年）。後ろにみえるのは「仁風閣」。

建設工事（昭和45年～47年）の様子。
建設前は公設グラウンドだった。

「私たちの県民立美術館」の動き

固まりつつある新しい美術館の姿

令和７年春開館予定の新しい県立美術館は新型コロナウイルス感染症の影響を受けることもなく、着々と準備を進めています。建築計画も基本設計から実施設計の段階に入り、整備運営を担当していただく鳥取県立美術館パートナーズ株式会社の皆さんたちと頻繁に会議を重ねて、細部を詰めています。

新しい美術館の特徴は敷居の低さだと思います。大御堂廃寺跡の広大な敷地に向かって開けた１階の「ひろま」は美術館というよりも、ふらりと立ち寄って気兼ねなく過ごす居間のような空間です。家でも学校でも職場でもない空間はサード・プレースと呼ばれますが、放課後や休憩時間に訪れてはぼんやりと過ごす、そんな空間が美術館の中にあることは素敵ではないでしょうか。気が向けばワークショップに参加してもよいし、階上に向かって美術作品と親しんでもよい。肩ひじを張って美術鑑賞や勉強をするのではなく、ゆるく開かれた場としての新しい美術館の姿が図面から見えてきます。先日リニューアルした滋賀県立美術館も「リビングルームのような美術館」を標榜していました。私たちの県立美術館も新しい美術館のかたちを提案したいと考えます。

多様な視線の交錯によって生み出される創造性あふれる「ひろま」の雰囲気

美術館に関する情報は、こちらのホームページをご覧ください。
https://tottori-moa.jp/

（館長　尾崎（おさき） 信一郎（しんいちろう））

鳥取県ミュージアムネットワーク連携事業

北栄みらい伝承館との共同企画展を開催！

「不滅の刀 ～よみがえる伯耆国の赤羽刀（あかばねとう）～」

会　期　令和3年
11月27日（土）～12月19日（日）
午前9時 ～ 午後5時

休館日　11月29日（月）、12月6日（月）、12月13日（月）

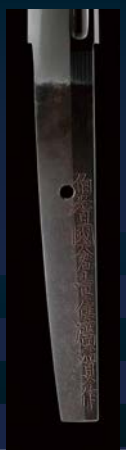
問合先
会　場　**北栄みらい伝承館**
鳥取県東伯郡北栄町田井47－1
（北条庁舎向い）TEL 0858-36-4309

入場無料

本展は、県立博物館が平成 11 年（1999 年）に文化庁より譲渡を受けた接収刀剣類（赤羽刀）のなかから、伯耆国ゆかりの刀剣を中心に紹介する展覧会です。

赤羽刀とは、昭和 20（1945）年9月以降に、連合国軍最高司令官総司令部が、武装解除の一環として、全国から接収した刀剣類の一群を指します。東京都北区赤羽の米軍施設に保管されていたことから、俗に「赤羽刀」と呼ばれました。本展では、再研磨によってよみがえった赤羽刀のうち廣賀（ひろよし）、正綱（まさつな）、寿綱（としつな）、吉幸（よしゆき）、包則（かねのり）といった刀工作品を県中部では初めて展示します。

（学芸課　来見田（くるみだ） 博基（ひろき））



刀　銘　伯耆国倉吉住廣賀作／元和六年八月吉日

鳥取県立博物館ニュース No.32

令和3年（2021年）9月24日発行
編集・発行　鳥取県立博物館
住所　〒680-0011 鳥取市東町2丁目124番地
TEL　0857（26）8042（代）
FAX　0857（26）8041
URL　https://www.pref.tottori.lg.jp/museum/
E-mail　hakubutsukan@pref.tottori.lg.jp

博物館 HP

■入 館 料：常設展／一般180（150）円
（　）内は20名様以上の団体料金
■開館時間：9時～17時（入館は16時30分まで）。
一部、19時（入館は18時30分）まで開館の土曜日あり。詳細はお問い合わせください。
■休 館 日：毎週月曜日（祝日の場合は翌平日が休館日）
国民の祝日の翌日（土、日、祝日の場合を除く）
年末年始（12月29日～1月3日）
※具体的な休館日等は、ホームページでご確認ください。

■JR鳥取駅からバスで
●Ⓐ100円バス「くる梨」緑コース「⑪仁風閣・県立博物館」下車すぐ
●Ⓑループ麒麟獅子「③鳥取城跡」下車すぐ
●Ⓒ砂丘・湖山・賀露方面行「西町」下車、約400m
●Ⓓ市内回り岩倉・中河原方面行「わらべ館前」下車、約600m
■JR鳥取駅からタクシーで…約10分
■鳥取砂丘コナン空港から…鳥取駅行連絡バス「西町」下車、約400m
■お車で…鳥取自動車道・鳥取ICまたは鳥取西ICより約15分
※当館駐車場21台駐車可能・満車の場合は県庁北側駐車場［無料］へ

お客様の満足のその先へ…
MORRIX
株式会社モリックスジャパン
TEL 0857-23-3641
本　社　鳥取市商栄町２０３－６
倉吉店　倉吉市下田中町８７０　中瀬ビル３Ｆ
http://www.morrix.co.jp/

日本通運 NIPPON EXPRESS
鳥取事業所　0857-28-0202